

参考資料

- 1 次世代ブロードバンド戦略 2010
(平成 18 年 8 月 総務省総合通信基盤局高度通信網振興課)
- 2 地域情報通信基盤整備推進交付金実施マニュアル (注)
(平成 18 年 5 月 総務省情報通信政策局地域通信振興課)
- 3 地域イントラネット基盤施設整備事業実施マニュアル (注)
(平成 18 年 4 月 (Ver.1) 総務省情報通信政策局地域通信振興課)
- 4 地方公共団体が整備・保有する光ファイバ網の電気通信事業者
への開放に関する標準手続 (第 2 版)
(平成 16 年 6 月 総務省総合通信基盤局高度通信網振興課)

(注) 上記 2、3 につきましては、現在改訂中のため本資料には掲載しており
ません。準備が整い次第公表する予定です。

次世代ブロードバンド戦略 2010

- 官民連携によるブロードバンドの全国整備 -

はじめに

平成 16 年 12 月に総務省において公表した「u-Japan 政策」及び本年 1 月に IT 戦略本部で決定された「IT 新改革戦略」等において 2010 年度を目標年度とするブロードバンドの全国整備の方針が示されたところである。

「次世代ブロードバンド戦略 2010」は、この方針を受けて、総務省として 2010 年度へ向けたブロードバンド・ゼロ地域の解消等の整備目標、ロードマップの作成等の整備の基本的な考え方、官民の役割分担、関係者による推進体制の在り方を明らかにするものである。

今後、総務省では、本戦略を踏まえ、ブロードバンドの全国整備を積極的に推進していくこととする。

2010 年度へ向けたブロードバンドの整備目標

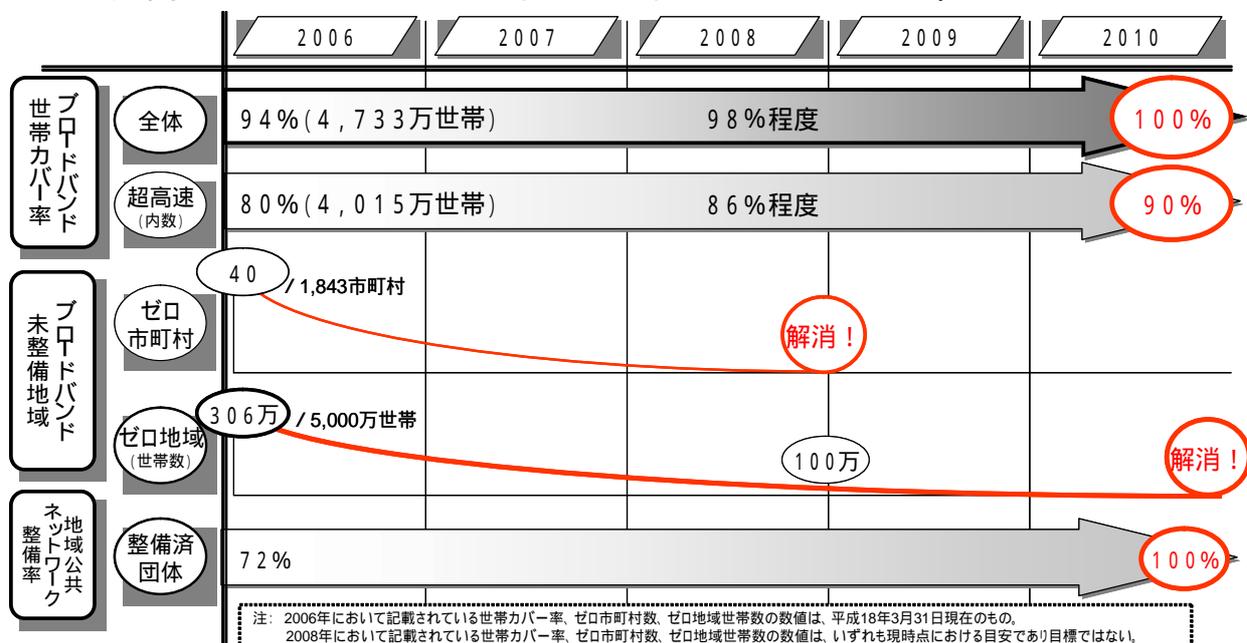
整備目標¹

2010 年度までに、

ブロードバンド・ゼロ地域を解消する。

(その過程において、ブロードバンド・ゼロ市町村²を 2008 年度までに解消する。)

超高速ブロードバンド³の世帯カバー率⁴を 90%以上とする。



- 「u Japan 政策」(平成 16 年 12 月 総務省)、「IT 新改革戦略」(平成 18 年 1 月 IT 戦略本部)及び「ICT 政策大綱」(平成 17 年 8 月 総務省)【参考 1】
- ブロードバンド・ゼロ市町村:ブロードバンド・ゼロ地域 (FTTH、ADSL、ケーブルインターネット等いずれのブロードバンド・サービスも全く利用できない世帯が存在する地域)が、全域に及ぶ市町村。
- 超高速ブロードバンド:上り(アップロード)・下り(ダウンロード)の双方向とも 30Mbps 級以上であるブロードバンドを想定。
- 世帯カバー率:ブロードバンド・サービスエリア内の世帯数が全世帯数に対し占める比率。

1. 基本的な考え方¹

(1) ブロードバンド整備における原則

民間主導原則と国による公正競争の確保・投資インセンティブの付与、技術中立性の確保

ブロードバンド整備は、引き続き民間主導原則の下、国において適切な競争政策を行うとともに、事業者に対して投資インセンティブを付与²することにより、これを促進する。

その際、原則として、技術中立的な立場で多様な技術によるブロードバンドの全国整備を図る。

(2) 条件不利地域等投資効率の悪い地域における整備

関係者の連携と推進体制の構築によるロードマップに沿った整備

ブロードバンド・ゼロ地域に代表されるような、民間投資のみでは整備が進みにくい条件不利地域等においては、事業者・国・都道府県・市町村・地域住民等の関係者が連携³し、それぞれが適切な役割を果たすことが必要である。

このため、全国レベル及び地域レベルにおいて、関係者の協議の場・推進体制を積極的に設置し、ロードマップを作成してこれに沿った整備に取り組むことが望ましい。(3.関係者による推進体制 参照)

地域のニーズ等に応じた多様な技術が利用できる環境の整備

このような地域においては、投資効率を勘案しながら、地域のニーズや実情に応じた適切な技術が利用できる環境の整備⁴を図る。

自治体光ファイバ網の開放等による効率的な整備の推進

このような地域においては、地方公共団体が自己設置する光ファイバ網の民間開放⁵や、無線によるワイヤレス・ブロードバンド技術等の導入を積極的に促進し、効率的な整備を推進する。

(3) 積極的な需要喚起・利活用の促進

ブロードバンドの効用や利活用方策をイベント等の機会を捉えて継続的に利用者に提示することは、加入者増と安定的な維持運用につながる。このため、関係者は周知啓発活動やアプリケーション開発等による需要喚起や利活用の促進にも積極的に取り組むことが望ましい。

- 1 全国でブロードバンド・サービスを利用可能とするために、民主導を原則に置き、公正な競争を確保しつつ、事業者に対する投資インセンティブの付与、地域公共ネットワークの全国整備・共同利用や地域の創意工夫を引き出す等の国による必要に応じた支援、及びブロードバンド無線アクセス、UWB、PLC のような新たな電波利用システム等の実現を図る。(IT 新改革戦略)
- 2 国は、接続ルール等の適切な競争政策を行うとともに、電気通信基盤充実臨時措置法(平成3年法律第27号)により事業者に対する投資インセンティブを付与する等、民間主導による整備を促進する。
- 3 地理的条件や地域の有する資源、住民のニーズ等は地域により多様であると考えられることから、2010年度までに効率的に整備を推進するため、各地域における関係者の連携が極めて重要。また、このような地域の取組みを促し、支援するためにも、全国レベルにおける連携も必要。
- 4 多様な技術及びそれらの融合技術等、地理的条件や利用形態によって様々な技術が利用できることが必要である。したがって、国としては技術中立的な立場でブロードバンドの全国整備を図りつつ、それぞれの地域においては、ニーズに応じた適切な技術が利用できる環境の整備を図っていく。
- 5 民間開放が円滑に進むよう、総務省において「地方公共団体が整備・保有する光ファイバ網の電気通信事業者への開放に関する標準手続(第2版)」を策定している。

2. 役割分担

今後のブロードバンド整備、特に条件不利地域等における整備にあっては、以下の関係者のそれぞれにおいて、次のような役割が期待される。

(1) 事業者

- ・ ブロードバンド未整備地域における積極的な整備、地域公共ネットワーク等の活用
- ・ ブロードバンド・サービスの提供エリアや今後の整備見通し等に関する情報の積極的開示・公表
- ・ 地域における効用・利活用方策等の提示による需要喚起・利活用の促進
- ・ 全国レベル及び地域レベルでの関係者の協議への積極的参加

(2) 地方公共団体

都道府県

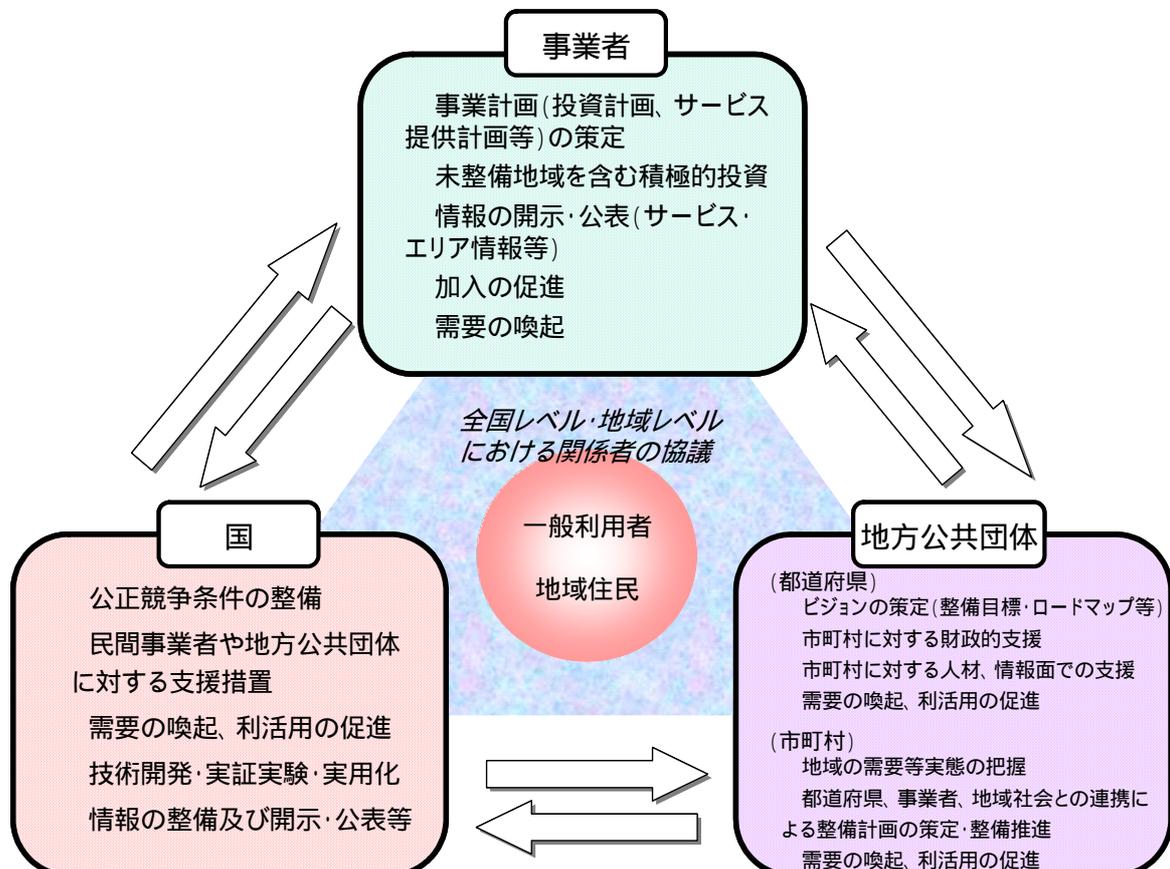
- ・ 地域レベルでの推進体制整備やビジョン(整備目標・ロードマップ等)の作成等、地域での枠組み作り
- ・ 関係市町村に対する財政支援、専門的知見・経験を有する人材支援、情報・ノウハウの提供等の支援
- ・ 事業者・市町村等との連携による需要喚起・利活用の促進

市町村

- ・ 域内住民(特に未整備地域住民)の需要の内容・規模等の実態把握
- ・ 事業者・都道府県等との連携による地域ごとの整備計画の策定、地域公共ネットワーク等の開放
- ・ 地域における効用・利活用方策等の提示による需要喚起・利活用促進

(3) 国

- ・ 公正競争条件の整備
接続ルール、コロケーションルール等
- ・ 事業者に対する投資インセンティブの付与
電気通信基盤充実臨時措置法に係る利子助成等
- ・ 地域における取組みに対する支援
地域情報通信基盤整備推進交付金、地方財政措置(過疎対策事業債等)、地域公共ネットワークの全国整備の推進¹及び地方公共団体整備による光ファイバ網の積極的開放、「地方公共団体が整備・保有する光ファイバ網の電気通信事業者への開放に関する標準手続(第2版)」の周知徹底、仕様の標準化等
- ・ 無線技術等多様な技術の導入促進
広帯域無線システム等に関する技術基準の策定や周波数の確保等、条件不利地域等におけるブロードバンド技術についての研究開発・実証実験
- ・ 関係者の協議の場の設置促進
事業者、都道府県、市町村等から成る全国レベルの推進体制の構築促進、地域の実情に応じた地域レベルの推進体制の構築促進
- ・ 情報の整備・公表
ブロードバンド・サービスの提供エリア内の世帯数や光ファイバの整備状況等に関する情報の整備・マップ化等
- ・ 需要の喚起・利活用の促進
利活用に関する調査研究の実施や利活用モデルの提示による需要の喚起



1 2010年度までに全国整備(100%)を推進。2005年7月現在72%の地方公共団体で整備。

3. 関係者による推進体制(1(2) 関連)

(1) 全国レベルの推進体制

全国レベルでの推進体制においては、事業者、都道府県、市町村等の参加を得て、以下のような事項に取り組むこととする。

ブロードバンドの全国整備の意義と必要性、地域における取組みの必要性に関する認識の共有

地域における取組みに関する基本的な方向性の提示(各地域におけるロードマップの作成方針とこれに沿った整備の推進)、情報・ノウハウの提供等による支援・促進

ブロードバンドの全国的な整備状況や国・地方公共団体の施策、地域での取組事例等に関する情報共有、各種周知啓発活動

(2) 地域レベルの推進体制

各地域レベルにおいても、事業者、地方公共団体等の参加を得た推進体制が構築されることが必要であり、以下のような事項に取り組むこととする。

全国レベルの推進体制が示す方向性を踏まえ、具体的な取組事項等について、地域ごとに検討

都道府県を単位とすることを原則としつつ、地域の実情に応じてロードマップを作成

政府のICT政策におけるブロードバンドの整備目標

以下の目標を整理したものを、本戦略における整備目標としている。

○「u-Japan 政策」(平成16年12月 総務省)

8.1 ユビキタスネットワーク整備に向けた新たな目標

(前略)新たな目標として「2010年までに国民の100%が高速または超高速を利用可能な社会に」を設定することを提言する。(後略)

○「IT 新改革戦略」(平成18年1月19日 IT 戦略本部)

2. IT 基盤の整備

(1) デジタル・ディバイドのない IT 社会の実現

目標

2011年7月を目標として、「いつでも、どこでも、何でも、誰でも」使えるデジタル・ディバイドのないインフラを実現することで、ユビキタス化を推進する。

1. 2010年度までに光ファイバ等の整備を推進し、ブロードバンド・ゼロ地域を解消する。

○「ICT 政策大綱」(平成17年8月 総務省)

II 各論

1. ユビキタスネットワーク整備～シームレスで快適なユビキタス社会へ

(1) 地理的デジタル・ディバイドの解消

[対応策]

① 2008年までにブロードバンド・ゼロ市町村を解消、2010年までにブロードバンド・ゼロ地域を解消し、ブロードバンド基盤の全国的整備を実現する。

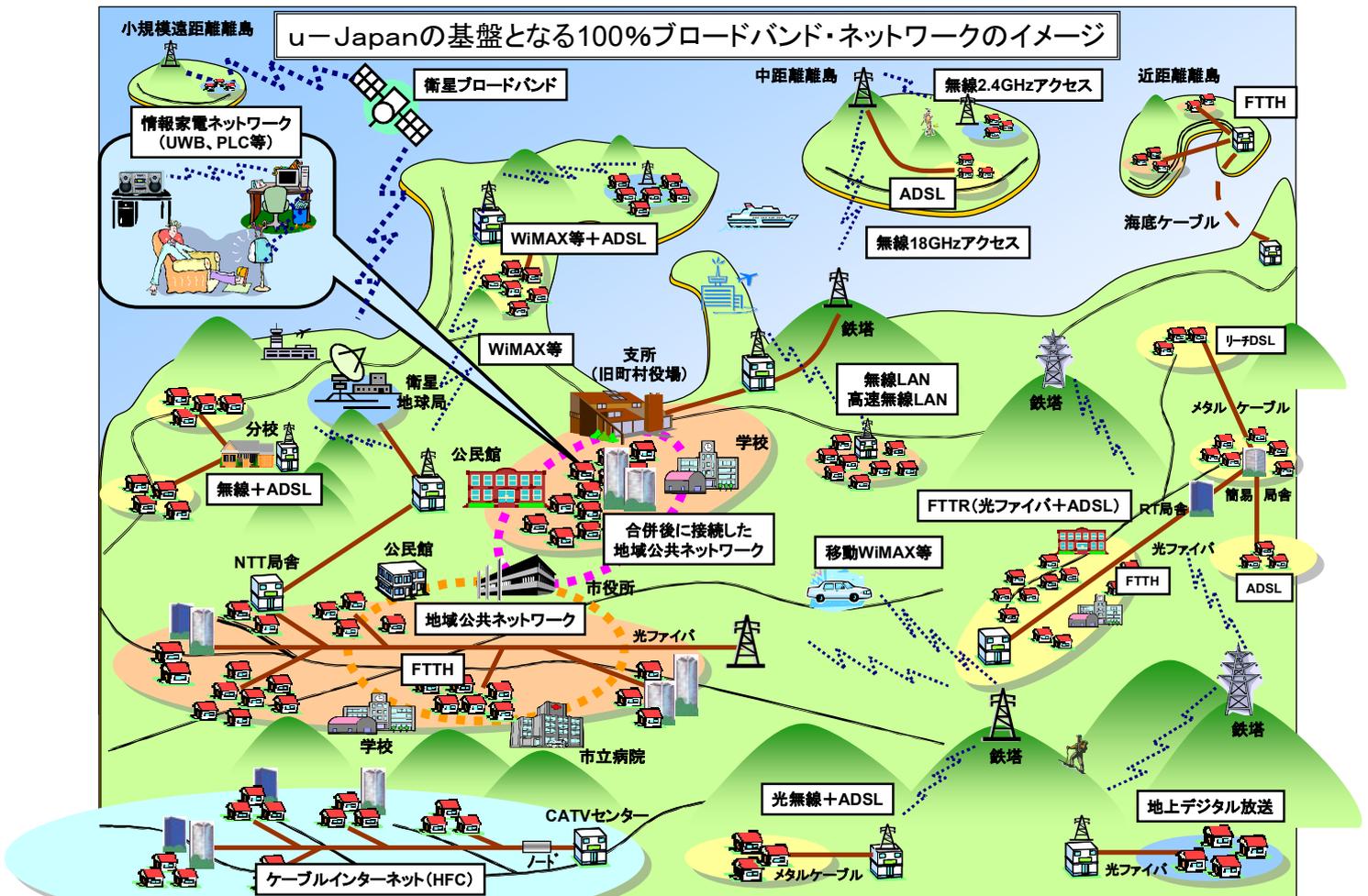
② 国際競争力の強化等の観点から、2010年までに上り30Mbps級以上の次世代双方向ブロードバンドの世帯カバー率を90%以上とする。

2010年度におけるブロードバンド整備像

1. 100%ブロードバンド・ネットワークの実現イメージ

2010 年度において、ブロードバンド・ゼロ地域が解消した場合の「100%ブロードバンド・ネットワーク」の実現イメージは、次のとおりと考えられる。

- (1) 全般的には、多様な有無線技術¹ がシームレスに連携・融合し、全国においていずれかのブロードバンド・サービスにアクセスが可能となる。
- (2) 投資効率が悪い地域では、投資効率と地域のニーズを反映した形² で実現される。具体的には、ADSL やケーブルインターネットに加え、
 - ① 無線 LAN 等による ワイヤレス・ブロードバンド³
 - ② 「無線+ADSL/VDSL」、「光ファイバ+光無線」、「光ファイバ+ADSL(いわゆる FTTR(Fiber To The RT))」等、有無線の 融合型ブロードバンド⁴ 等により整備されると考えられる。
- (3) これらの多様なブロードバンド・サービスのうち、FTTH を中心とした超高速ブロードバンドが、全世帯の 90%で利用可能となる⁵。



2. ブロードバンドの利活用イメージ

地域においてブロードバンドを整備し、その利活用を図るイメージとしては、以下のよう
な事例が参考となる。

(1) 医療・福祉分野

- ① 遠隔診断支援(いわて医療情報ネットワーク〔岩手県〕)
- ② 家族から高齢者宅への定期的な声かけ(見守りサービス〔宮崎県木城町〕)

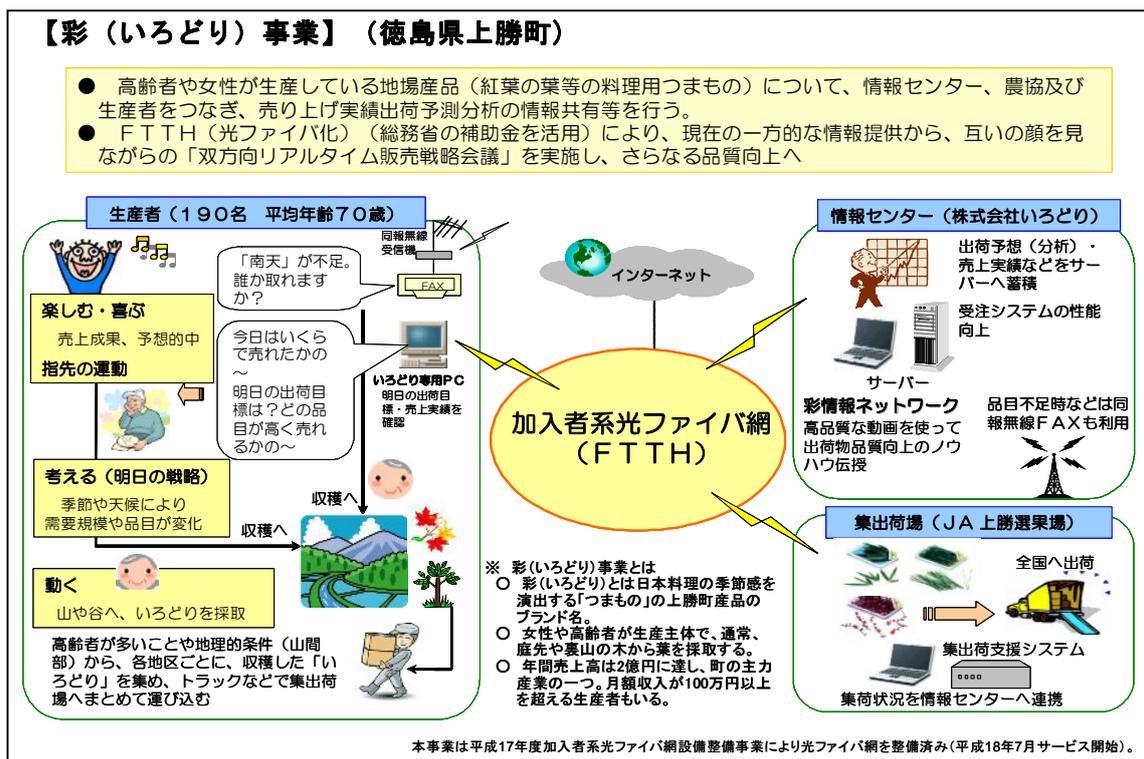
(2) 観光産業・地場産業

- ① 観光地の宿泊施設の予約・発注環境の整備〔北海道ニセコ町〕
- ② 地場産品販売の売上実績や出荷予測分析(彩(いろいろ)事業〔徳島県上勝町〕)

(3) その他、教育分野や雇用対策分野等

- ① eラーニング基盤の提供(インターネット市民塾〔富山県 ほか〕)
- ② 雇用支援の充実

(参考)



- 1 ①超高速ブロードバンドの核となる FTTH のほか、②迅速な整備が可能で低コストの ADSL、③地域のインフラ基盤であるケーブルインターネット及びその超高速化技術(c-Link、DOCSIS Ver.3)、④有線の補完等に有効な無線(FWA、無線 LAN 等)、⑤離島等の条件不利地域における利用等に有効な衛星ブロードバンド技術等が考えられる。
- 2 民間主導による整備においては、投資効率の良い都市部から順次投資が進展する。しかし、投資効率の悪い条件不利地域等においては、民間のみによっては整備が進みにくく、地域の事情を踏まえた市町村等の地方公共団体や地域住民の意向等、地域のニーズを反映した形で実現すると考えられる。

- 3 昨今では、無線 LAN や広帯域無線アクセスシステム(WiMAX 等)等、無線によるワイヤレス・ブロードバンド技術の進展も目覚ましく、特にブロードバンド・ゼロ地域など、整備の遅れた地域において有線ネットワークを補完する場合や、移動中の運用を想定したネットワークを構築する場合に有効であると考えられる。
- 4 上記1の多様な技術を地理的条件や利用形態により様々な形で連携・融合させる。
- 5 超高速ブロードバンドは、FTTH の他に、ケーブルインターネットの超高速化技術や広帯域無線アクセスシステム等により整備が図られると考えられる。双方向による動画・映像伝送等高度な利活用を考慮すれば、将来的には超高速ブロードバンドが全国整備されることが望ましいが、当面 2010 年度における超高速の整備目標を 90%とする。
超高速化技術のうち、光ファイバは、高速大容量性や安定性といった機能面において優れた特性を有しているとともに、多様なブロードバンドのバックボーン回線としても必須のものである。このため、超高速ブロードバンドの利用環境整備を図る観点からは、その早期の全国整備が実現することが望ましい。

整備の現状とブロードバンド・ゼロ地域の概観・課題

1. 整備の現状

(1) 整備状況

ブロードバンドの整備は着実に進捗しているが、未整備地域も残されている。

① いずれかのブロードバンドが利用可能

- ・ 全世帯の約 94% (4,733 万世帯)で、いずれかのブロードバンドが利用可能
- ・ 全市町村の約 98% (1,803 市町村)で、その全部又は一部地域で利用可能

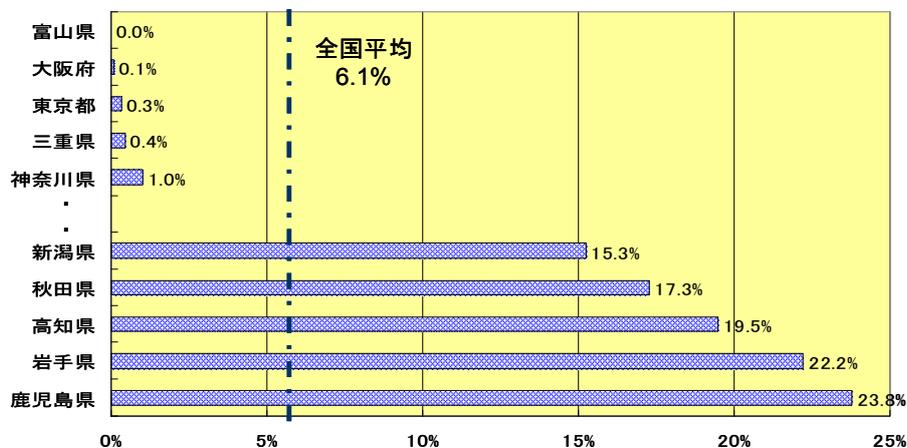
② ブロードバンド未整備

- ・ 全世帯の約 6% (306 万世帯)が全く利用できないブロードバンド・ゼロ地域
- ・ 全市町村の約 2% (40 市町村)がブロードバンド・ゼロ市町村

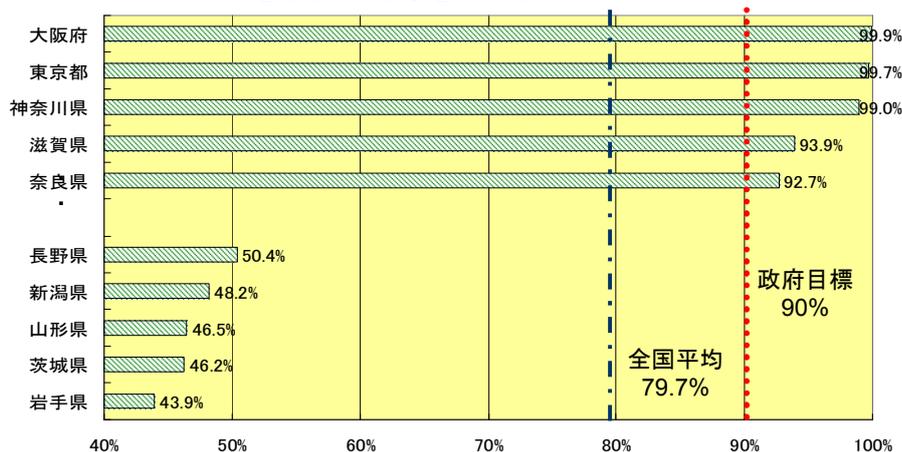
(2) 地域間格差の現状

ブロードバンド・ゼロ地域の世帯(306万世帯)について都道府県別に見ると、ゼロ地域の世帯の全世帯に対する比率は「1%以下」～「20%以上」と格差大。

**ブロードバンド・ゼロ地域の世帯比率
【都道府県別】(平成18年3月末)**



**FTTHサービス利用可能世帯比率
【都道府県別】(平成18年3月末)**



[ブロードバンドの整備状況:平成 18 年 3 月末現在]

いずれかのブロードバンド	利用可能	未整備
世帯数	4,733 万世帯 (93.9%)	306 万世帯[ゼロ地域] (6.1%)
市町村数 (平成 18 年 4 月 1 日区分)	1,803 団体 (97.8%)	40 団体[ゼロ市町村] (2.2%)
同上 (平成 16 年 4 月 1 日区分)	2,994 団体 (95.9%)	129 団体[ゼロ市町村] (4.1%)
FTTH サービス	利用可能	未整備
世帯数	4,015 万世帯 (79.7%)	1,024 万世帯 (20.3%)
市町村数 (平成 18 年 4 月 1 日区分)	986 団体 (53.5%)	857 団体 (46.5%)
同上 (平成 16 年 4 月 1 日区分)	1,191 団体 (38.1%)	1,932 団体 (61.9%)

※ 利用可能欄の市町村数には、一部地域に提供している場合も含む。

なお、ここでいうブロードバンドは、一般世帯や事業所で固定的に利用される FTTH、ADSL、ケーブルインターネット、無線(FWA)を対象としている。

[ブロードバンド・サービスの契約数:平成 18 年 3 月末現在]

	ブロードバンド 合計	FTTH	ADSL	ケーブル インターネット	無線 (FWA)
契約数	2,330 万	546 万	1,452 万	331 万	1.6 万

※ ブロードバンド合計:FTTH、ADSL、ケーブルインターネット、無線(FWA)の合計。

2. ブロードバンド・ゼロ地域の概観と課題

(1) ブロードバンド・ゼロ地域の有する地理的条件

ブロードバンド・ゼロ地域は、市町村の一部地域である場合から全域に及ぶ場合まで様々であるが、一般にゼロ地域には、次のような地理的条件を有している傾向が見られる。

- ① 面積に比較して、世帯密度が著しく低い
- ② 地域の主要都市や市街地から比較的遠い
- ③ 他地域へのアクセスが困難又は基幹交通網からの距離が遠い

(2) ブロードバンド・ゼロ地域が抱える課題

ブロードバンド・ゼロ地域は、上記(1)のような地理的条件その他の事情から派生する、次のような課題¹を抱えている。このため、こうした課題の解決を図ることが、ゼロ地域の解消につながるものと考えられる。

- ① 需要規模の著しい不足
- ② 相対的に高い整備コスト
- ③ 中継系光ファイバの不足
- ④ 収容局からの距離による信号の減衰(ADSLの場合)
- ⑤ 事業者・地方公共団体における人材の不足
- ⑥ 多様な目的に対し効率的な投資により対応する必要性

1 ①から⑥の6つの課題に関する詳細は以下のとおり。

- ① 比較的整備コストの低いADSLサービスも提供されない、極めて世帯数が少ない等需要規模が著しく小さい場合が想定される。
- ② 線路敷設を要する光ファイバの場合は、面積の大きさや主要都市から遠いこと等が整備コスト増につながり、ADSLの場合は、収容局が通常無人の小規模局(いわゆるRT(Remote Terminal)局)であって簡易局舎等を新たに設置する必要がある等が考えられる。
- ③ 山間部や離島等の場合、収容局(RT局であることが通例)からバックボーンにつながる中継系光ファイバの芯線や回線容量が不足又は欠如している場合が考えられる。
- ④ ADSLの場合、収容局からの距離が概ね4kmを超える場合には、高速回線としては実用に耐える通信速度が出ないことがある。
- ⑤ 本土からのアクセスの悪い離島等、人口が少なく、都市部からのアクセスに制約がある地域の場合、障害発生時等の対応要員の確保が困難であるなど、保守管理体制の整備が難しいことが阻害要因となることが考えられる。また、地方公共団体内にネットワーク分野での知見・経験を有する人材が一般的に不足していることが、整備推進の阻害要因となる場合がある。
- ⑥ 投資効率の悪い地域においてインフラ整備を行う場合、インターネット・アクセスのほか、料金の低廉なIP電話、映像伝送(放送難視聴地域における放送再送信を含む)、行政からの情報提供等及びこれらの統合型サービス等、多様なニーズに対して最も効率的な投資で応える必要がある場合が見られる。

地方公共団体が整備・保有する光ファイバ網の
電気通信事業者への開放に関する標準手続
(第 2 版)

平成 16 年 6 月
総 務 省

連絡・問合せ先：
総合通信基盤局
電気通信事業部高度通信網振興課
TEL：03-5253-5866
FAX：03-5253-5868

【目 次】

第1章 標準手続策定の背景・目的	・ ・ ・ ・ 1
1. 高速・超高速インターネットにおける光ファイバ網の位置付け	・ ・ ・ ・ 1
2. 既存光ファイバ網の有効活用の必要性	・ ・ ・ ・ 1
3. 国・地方公共団体が整備・保有する光ファイバ網	・ ・ ・ ・ 2
4. 標準手続策定の必要性	・ ・ ・ ・ 2
5. 標準手続の位置付け	・ ・ ・ ・ 3
第2章 地方公共団体が整備・保有する光ファイバ網の現状	・ ・ ・ ・ 4
1. 地方公共団体が整備・保有する光ファイバの種類	・ ・ ・ ・ 4
(1) 公共施設管理用光ファイバ	・ ・ ・ ・ 4
(2) 地域公共ネットワーク	・ ・ ・ ・ 4
(3) その他	・ ・ ・ ・ 4
2. 開放可能な光ファイバ網が発生する背景	・ ・ ・ ・ 5
第3章 開放に係る電気通信事業法上の整理（開放スキーム関係）	・ ・ ・ ・ 6
1. 芯線単位で開放する場合	・ ・ ・ ・ 7
(1) 地方公共団体が、IRU 契約に基づき、電気通信事業者に対して光ファイバ等を貸与するスキーム	・ ・ ・ ・ 7
(2) 地方公共団体が電気通信事業の登録又は届出を行い、他の電気通信事業者へ卸電気通信役務の提供を行うスキーム	・ ・ ・ ・ 8
2. 波長・帯域単位で開放する場合	・ ・ ・ ・ 9
第4章 開放に係る地方自治法上の整理（財産管理関係）	・ ・ ・ ・ 10
1. 公有財産と分類する場合	・ ・ ・ ・ 11
(1) 公有財産（行政財産）と分類する理由付け	・ ・ ・ ・ 11
(2) 財産管理に関する地方自治法の規定等	・ ・ ・ ・ 11
2. 物品と分類する場合	・ ・ ・ ・ 12
(1) 物品と分類する理由付け	・ ・ ・ ・ 12
(2) 財産管理に関する地方自治法の規定等	・ ・ ・ ・ 12
3. 開放に適合する財産管理区分	・ ・ ・ ・ 13

第5章 開放に係る標準手続	・ ・ ・ ・ 15
1. 標準手続の対象とするスキーム	・ ・ ・ ・ 15
2. 民間主導原則との関係	・ ・ ・ ・ 15
3. 標準手続	・ ・ ・ ・ 16
(1) 準備手続	・ ・ ・ ・ 17
(2) 開放可能な未利用の光ファイバ芯線情報の集約	・ ・ ・ ・ 19
(3) 開放可能な未利用の光ファイバ芯線の開放に係る基本的事項の決定	・ ・ ・ ・ 19
(4) 開放可能な未利用の光ファイバ芯線情報の公開	・ ・ ・ ・ 21
(5) IRU 契約の締結	・ ・ ・ ・ 23
(6) 公共施設内への関連機器等の設置に係る手続（行政財産の目的外使用許可に係る手続）	・ ・ ・ ・ 25
(7) 接続工事等	・ ・ ・ ・ 26
別添 光ファイバ芯線の賃貸借に関する契約書の一例	・ ・ ・ ・ 27

第1章 標準手続策定の背景・目的

1. 高速・超高速インターネットにおける光ファイバ網の位置付け

政府においては、「2005年度までに世界最先端のIT国家となる」という目標の実現に向けて、平成13年1月に策定されたIT国家戦略である「e-Japan戦略」の見直しを行い、平成15年7月に「e-Japan戦略」を策定したところである。また、平成16年6月には、e-Japan戦略の具体的なアクションプランである重点計画の見直しを行い、「e-Japan重点計画-2004」を公表している。

「e-Japan重点計画-2004」においては、5つの重点政策分野の一つとして「世界最高水準の高度情報通信ネットワークの形成」を掲げているところであり、超高速インターネットアクセスを実現する光ファイバ網は、その中核をなすものである。

2. 既存光ファイバ網の有効活用の必要性

光ファイバ網については、民間主導原則¹に基づき、電気通信事業者²等による整備が進められており、光ファイバ網を活用した一般利用者向けの超高速インターネットアクセスサービス³についても、世界に先駆けて、都市部を中心に提供が開始されている。

しかしながら、光ファイバ網を新たに敷設することは、多額の費用を要するものであり、採算性等の問題がある過疎地域等の条件不利地域⁴においては、

¹ 高度情報通信ネットワーク社会形成基本法(平成12年法律第144号)
(国及び地方公共団体と民間との役割分担)

第7条 高度情報通信ネットワーク社会の形成に当たっては、民間が主導的役割を担うことを原則とし、国及び地方公共団体は、公正な競争の促進、規制の見直し等高度情報通信ネットワーク社会の形成を阻害する要因の解消その他の民間の活力が十分に発揮されるための環境整備等を中心とした施策を行うものとする。

² 電気通信事業法(昭和59年法律第86号)第9条の規定に基づき電気通信事業の登録を受けた者又は同法第16条第1項の規定に基づき電気通信事業の届出をした者。CATV事業者が電気通信事業の登録又は届出を行い、CATVサービスとあわせてインターネットアクセスサービス等を提供する場合を含む。

³ 平成16年4月末現在、約124万加入。

⁴ 過疎地域自立促進特別措置法(平成12年法律第15号)により公示された「過疎地域市町村」のうち町村並びに辺地に係る公共的施設の総合整備のための財政上の特別措置等に関する法律(昭和37年法律第88号)により「辺地」に該当している地域、半島振興法(昭和60年法律第63号)により公示された「半島振興対策実施地域」、離島振興法(昭和28年法律第72号)により公示された「離島振興対策実施地域」、山村振興法(昭和40年法律第64号)により公示された「振興山村」及び特定農山村地域における農林業等の活性化のための基盤整備の促進に関する法律(平成5年法律第72号)により公示された「特定農山村地域」のいずれかを含む町村。

民間事業者による光ファイバ網の整備が進まず、高速・超高速インターネットアクセス環境の整備に関して、地理的情報格差が生じるといった問題⁵が発生している。

他方で、光ファイバ網については、電気通信事業者が敷設するもの以外にも、電気通信サービスの提供とは異なる目的で、電力事業者、鉄道事業者、国、地方公共団体等が整備を行っている。これらの光ファイバ網の中には、一部未利用の芯線として、電気通信サービスに用いることが可能なものも存在しており、これらを有効活用することにより、電気通信事業者のより柔軟なネットワーク構築が可能となると同時に、全国的な高速・超高速インターネットアクセス環境の整備も一層促進されるものと期待される。

3. 国・地方公共団体が整備・保有する光ファイバ網

とりわけ、第2章にも記述するように、国、地方公共団体が公共施設の管理や地域の情報化の観点から整備する光ファイバ網は、民間事業者が整備するものと異なり、都市部に限らず、過疎地域等の条件不利地域においてもある程度存在している。

したがって、これらの光ファイバ網を電気通信事業者に開放し、有効活用を促進することは、地理的な情報格差を是正する観点から大きな効果が期待されるものである。

4. 標準手続策定の必要性

国が保有する道路・河川といった公共施設管理用光ファイバについては、貸し手である国土交通省が、平成14年度に光ファイバの貸与にかかる「兼用工作物管理協定」を策定し、準備の整った箇所から開放を順次進めているところである⁶。

地方公共団体が保有する光ファイバ等（光ファイバケーブル及び関連機器）の貸与に関する事項については、貸与を行う地方公共団体が主体的に決定するものであるが、標準手続を示すことで貸与手続や情報提供の共通化を促進することにより、手続の円滑化を図ることが求められているところである。

⁵ 例えば、加入者系光ファイバ網の整備率について、平成16年3月末現在、全国平均は約80%であるが、このうち、政令指定都市・県庁所在地級都市は約94%であるのに対し、人口10万人未満の地域においては、約59%にとどまる等地域格差が生じている。

⁶ 平成14年6月25日付国土交通省報道発表資料参照
(http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha02/01/010625_2.html)

5. 標準手続の位置付け

本標準手続については、地方公共団体が電気通信事業者に光ファイバ網を開放する際の参考として取りまとめたものであり、地方公共団体に対して本標準手続の採用を義務付けるものではない。

また、本標準手続については、現在の電気通信事業法、地方自治法(昭和 22 年法律第 67 号)の考え方を整理したものであり、従来の法解釈等に変更を加えるものではない。

第 2 章 地方公共団体が整備・保有する光ファイバ網の現状

1. 地方公共団体が整備・保有する光ファイバの種類

(1) 公共施設管理用光ファイバ

道路、河川、下水道といった公共施設の管理のために地方公共団体が整備するものである。道路、河川管理用光ファイバについては、国道、一級河川沿いに国が整備するものがほとんどであり、地方公共団体が整備しているものは少ない。下水道管理用光ファイバについては、多数の地方公共団体が整備している。

(2) 地域公共ネットワーク

地域の教育、行政、福祉、防災等の高度化を図ることを目的として、公民館、学校、役場などの公共施設を接続する行政ネットワークである。平成 15 年 7 月現在、3,207 の地方公共団体のうち、すでに 1,759 団体が整備済みであり、また 908 団体が 2005 年度までに整備する計画を有している。

地域公共ネットワークについては、「e-Japan 重点計画-2004」において、「高速・超高速で接続する地域公共ネットワークの全国的な普及について、2005 年度までの実現を目指し、地方公共団体等への支援を行う。」ことが明記されており、今後も整備が進むものと見込まれる。

(3) その他

その他、地方公共団体が運営する地下鉄等の線路沿いに敷設された運行管理用の光ファイバ網⁷や、採算性等の問題から民間事業者による光ファイバ網整備が見込まれない過疎地域等において、国の補助事業等を活用することにより地方公共団体が整備した加入者系光ファイバ網等が存在する。

⁷ 例えば、東京都交通局は都営地下鉄施設内の光ファイバを、名古屋市交通局は名古屋市営地下鉄施設内の光ファイバを貸し出している。

参考：http://www.kotsu.metro.tokyo.jp/etc_index.html
<http://www.kotsu.city.nagoya.jp/>

2. 開放可能な光ファイバ網が発生する背景

地方公共団体が光ファイバ網を整備する場合、想定される利用目的に応じた芯線数・帯域を確保して整備が行われるが、例えば、既製品の光ファイバケーブルを利用する場合⁸等に、未利用の光ファイバ芯線が生じることがある。このような場合には、当該未利用の光ファイバ芯線を、電気通信事業者への開放等、本来の整備目的以外の目的に活用可能となっているものである。

⁸ 補助事業の工事着工段階において、既製品の光ファイバケーブル（利用見込みを超える芯線数のもの）を活用した方が経済的に構築できる場合がある。この場合には、結果として、未利用の光ファイバ芯線が存在することとなる。

第 3 章 開放に係る電気通信事業法上の整理(開放スキーム関係)

地方公共団体が整備・保有する光ファイバ網⁹の電気通信事業者への開放スキームについては、開放の形態、すなわち、光ファイバを(1)芯線単位で開放(例：保有する光ファイバ芯線 100 芯のうち 10 芯を開放)するのか、(2)波長・帯域単位で開放(例：保有する光ファイバの伝送容量 100Mbps のうち 10Mbps を開放)するののかにより、選択肢が異なってくる。

開放形態	スキーム	概 要
(1)芯線単位で開放	IRU ¹⁰	地方公共団体が、電気通信事業者と長期安定的な使用権に関する契約（IRU 契約）を行うことにより、光ファイバ等を芯線単位で貸与するもの。
	卸電気通信役務	電気通信事業の登録又は届出 ¹¹ を行った地方公共団体が、他の電気通信事業者に対して卸電気通信役務の提供を行うもの。
(2)波長・帯域単位で開放	卸電気通信役務	同上。

⁹ 地方公共団体が管理する光ファイバ網については、自ら整備・保有しているものと、民間電気通信事業者の専用線サービスを利用しているものがあるが、後者については、地方公共団体が公共的に必要な芯線・帯域分を一般利用者と同様の立場で利用しているものであり、そもそも開放可能な芯線・帯域が発生しないはずのものであることから、本標準手続では対象としていない。

¹⁰ IRU（Indefeasible Right of User：破棄し得ない使用権）契約（協定）によって定められ、関係当事者の合意がない限り破棄又は終了させることができない長期安定的な使用権のこと。

¹¹ 地方公共団体が営利を目的とせず卸電気通信役務を提供する場合は、電気通信事業法第 9 条の登録及び第 16 条第 1 項の届出の手続によるのではなく、同法第 165 条第 1 項の届出を行う必要がある。

1. 芯線単位で開放する場合

光ファイバ等を芯線単位で開放する場合には、選択肢として以下のスキームがある。

(1) 地方公共団体が、IRU 契約に基づき、電気通信事業者に対して光ファイバ等を貸与するスキーム

IRU 契約を締結することにより光ファイバ等を貸し付ける場合は、借り手である電気通信事業者が電気通信回線設備を支配・管理するものとして規律されることとなり、貸し手である設備の所有者（地方公共団体）は、電気通信事業法・有線電気通信法（昭和 28 年法律第 96 号）の規定に基づく登録又は届出等を行う必要はない。

IRU により借り手が設備を支配・管理していると認められるためには、その契約において、以下の要件が充足されていることが必要である。

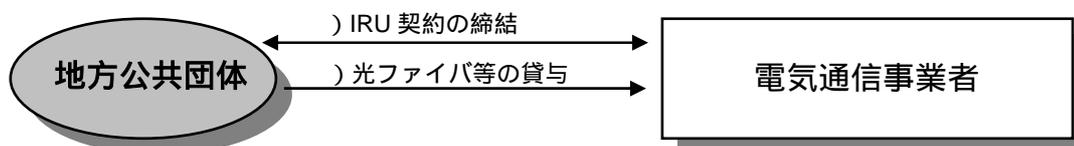
- ） 使用権を取得する電気通信事業者の同意なしに契約を破棄することができないこと。
- ） 使用期間全体にわたる合理的な使用料金の設定がされていること。
- ） 電気通信回線設備所有者によって対象物件に第三者担保権が設定されていないこと。
- ） 使用契約期間について、使用契約が安定的であると認められる以下のいずれかの要件を満たしていること。
 - ア) 使用契約期間が 10 年以上であること。
 - イ) 使用契約期間が 1 年以上であり、かつ、契約書等において、以下の点を確認されていること。ただし、使用契約期間の累計が 10 年を超える場合における当該超える部分に相当する契約については、この限りでない。
 - A 契約の自動更新の定めがあること。
 - B 電気通信事業者の同意がない限り、更新を拒否することができないこと。
 - ウ) その他ア)、イ)に類する特別の事情があると認められるものであること。

（詳細については、「電気通信事業者のネットワーク構築マニュアル」参照。

http://www.soumu.go.jp/joho_tsusin/policyreports/japanese/misc/NetWork-Manual/index.html）

なお、地方公共団体が行政財産として管理している光ファイバ等についてはIRU 契約の対象とすることができない(第4章1.(2) 参照)。

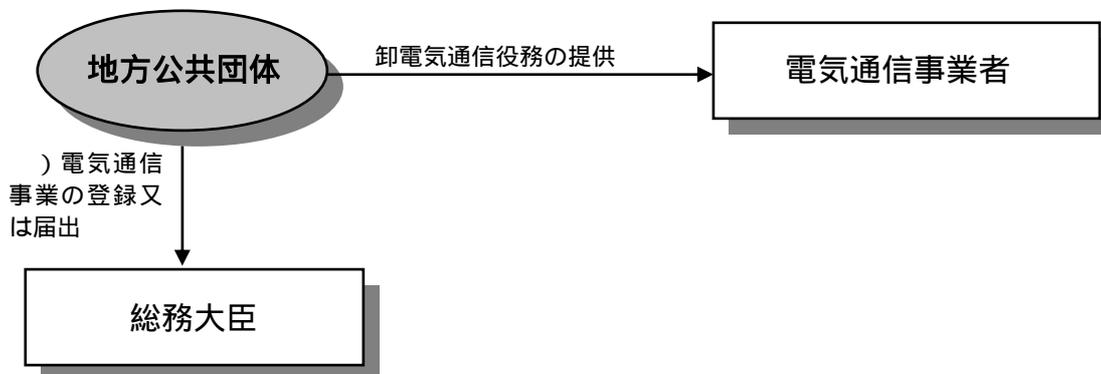
[IRU による開放スキーム]



(2) 地方公共団体が電気通信事業の登録又は届出を行い、他の電気通信事業者への卸電気通信役務¹²の提供を行うスキーム

光ファイバ網を整備・保有する地方公共団体が電気通信事業者として、他の電気通信事業者に対して、卸電気通信役務の提供を行うものである。(電気通信事業への参入に係る手続については、「電気通信事業参入マニュアル」参照。
http://www.soumu.go.jp/joho_tsusin/policyreports/japanese/misc/Entry-Manual/TBmanual02/entry02.pdf)

[卸電気通信役務の提供スキーム]



¹² 卸電気通信役務
専ら電気通信事業者の電気通信事業の用に供する電気通信役務のこと。

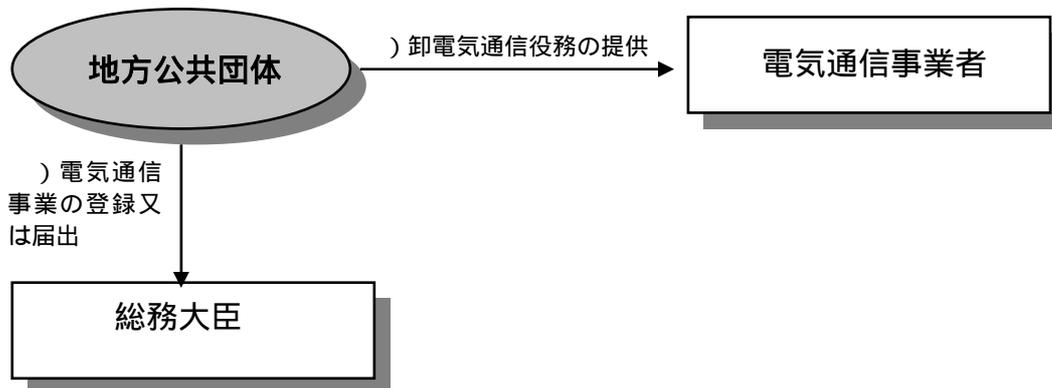
2. 波長・帯域単位で開放する場合

光ファイバ等を波長・帯域単位で開放する場合には、地方公共団体は電気通信事業の登録又は届出を行うことが必要である。

光ファイバ等を波長・帯域単位で開放する場合は、当該光ファイバ網の所有者が波長・帯域を発生させる波長分割多重化装置（WDM 装置）等を含め、伝送路設備全体を支配・管理している状態と認められる。

したがって、この場合は電気通信事業者側ではなく、所有者側、すなわち地方公共団体が、電気通信事業の登録又は届出を行い、ネットワークの安全・信頼性を確保し、一般利用者の利益を保護するため、その伝送路設備について、設備の損傷等の防止、利用者の通信内容の漏えいの防止といった技術基準への適合を維持しなければならない。

[帯域・波長単位での開放に係るスキーム（上記 1. (2)と同様）]

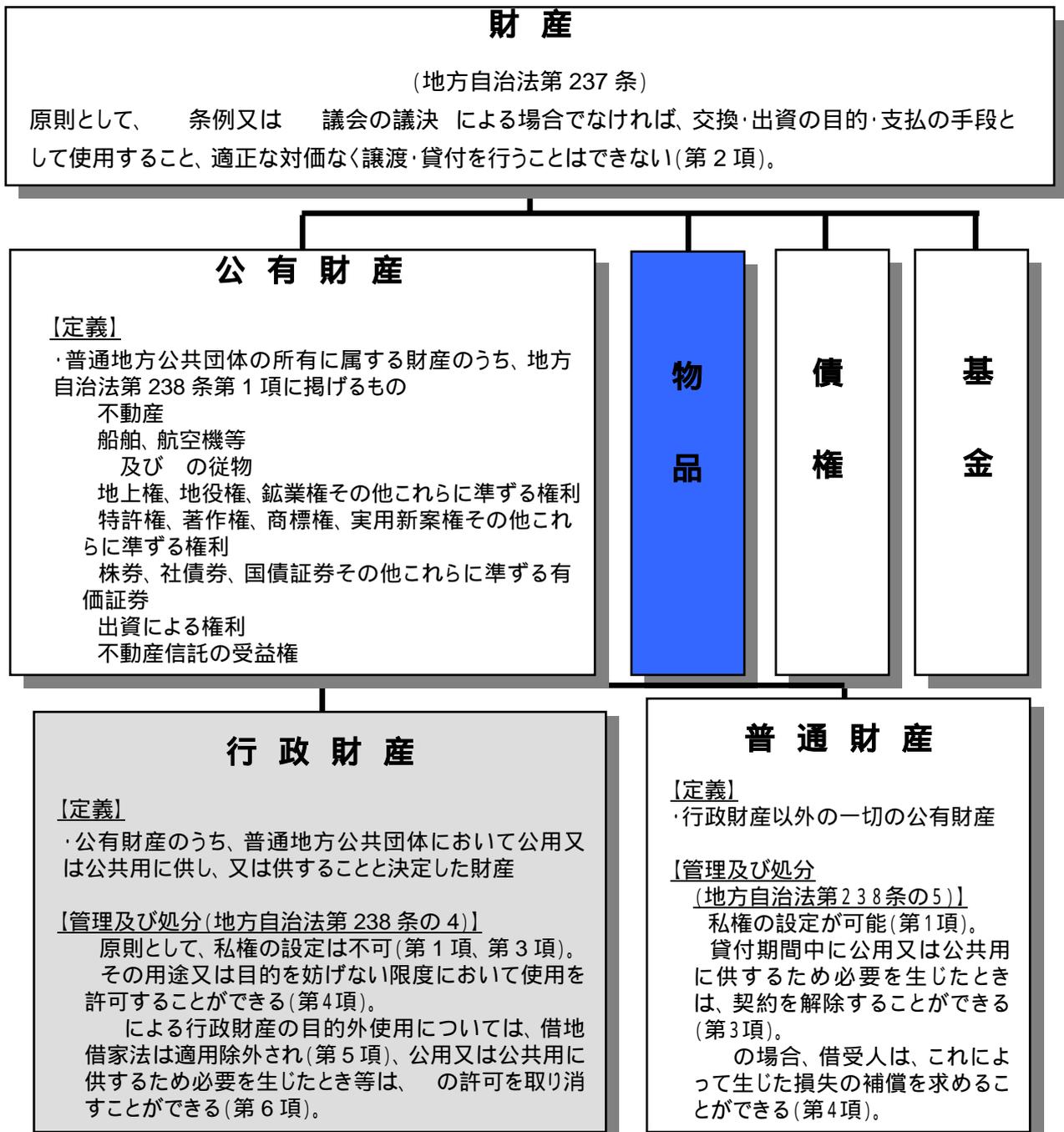


第4章 開放に係る地方自治法上の整理（財産管理関係）

地方公共団体が所有する光ファイバ等は、地方自治法の規定に基づき、適切に管理することが必要である。

地方公共団体が所有する財産は、地方自治法上、公有財産、物品、債権及び基金に分類され（地方自治法第237条第1項）、このうち公有財産はさらに行政財産と普通財産とに分類される（下図参照）。光ファイバ等が債権又は基金に該当しないことは明らかであるので、公有財産又は物品と分類することとなるが、公有財産と物品とでは、その管理・処分等に係る地方自治法の規定等が異なっている。

[地方公共団体の財産の区分]



1. 公有財産と分類する場合

(1) 公有財産（行政財産）と分類する理由付け

公有財産については、地方自治法第 238 条第 1 項に不動産、船舶・航空機等、不動産等の従物、地上権等とその種類が限定列挙されている。このうち光ファイバ等が該当し得る項目は「不動産の従物」のみである。このため光ファイバ等を公有財産と分類するためには、整備された光ファイバ網全体を、不動産たるセンタ施設等の従物と捉えることとなる。

公有財産については、これを地方公共団体において公用又は公共用に供し、又は供することと決定した行政財産と、その他一切の公有財産たる普通財産とに分類することができるが、その整備の財源を補助金や地方債に求めることによって整備された光ファイバ網は、行政や地域の情報化を進める等の公共目的をもって整備されたものであり、公用又は公共用に供されないことが通常は想定されないことから、原則としてこれを普通財産と分類することは不適當である。よって光ファイバ等を公有財産と分類する場合はこれを行政財産と分類することとなる。

(2) 財産管理に関する地方自治法の規定等

行政財産の管理についての地方自治法の規定等は、次の通りとなっている。

貸付方法

行政財産は基本的には、他者への貸付を想定しておらず、他者がこれを使用する場合には、いわゆる目的外使用許可を受ける必要がある（「行政財産は、その用途又は目的を妨げない限度においてその使用を許可することができる。」（地方自治法第 238 条の 4 第 4 項））。

またこの使用許可については、「公用若しくは公共用に供するため必要を生じたとき、又は許可の条件に違反する行為があると認めるときは、（中略）その許可を取り消すことができる。」（地方自治法第 238 条の 4 第 6 項）とされている。

貸付期間

行政財産の目的外使用の期間は、通常 1 年以内を原則とし、著しく実情に沿わない場合に限り、適宜必要の程度に応じて期間を延長することが適當であるとされている。

貸付料（使用料）

普通地方公共団体¹³は、使用許可を受けてする行政財産の使用につき使用料を徴収することができることとされており（地方自治法第 225 条）この使用料に関する事項については条例で定めなければならないとされている（地方自治法第 228 条第 1 項）。

なお、地方公営企業の用に供する行政財産を地方自治法第 238 条の 4 第 4 項の規定により使用させる場合に徴収する使用料に関する事項については、公営企業管理者が定めることとされている（地方公営企業法（昭和 27 年法律第 292 号）第 33 条第 3 項）。

その他

行政財産には私権を設定できないとされ（地方自治法第 238 条の 4 第 1 項）これに違反する行為は無効とされる（同条第 3 項）。したがって、行政財産として管理されている光ファイバ等を IRU スキームにより貸し付けることはできない。

2. 物品と分類する場合

(1) 物品と分類する理由付け

光ファイバケーブルや機器そのものに注目した場合、公有財産、債権、基金のいずれにも該当しないことから、地方自治法第 239 条第 1 項に規定する物品と分類することとなる。

(2) 財産管理に関する地方自治法の規定等

物品の管理についての地方自治法の規定等は、次の通りとなっている。

貸付方法

物品の貸付については、地方自治法上、下記 で述べる貸付料に係る規定以外に、特段の規定がない。貸付は、契約に基づいて行われることになる。

¹³ 都道府県及び市町村（地方自治法第 1 条の 3 第 2 項）。都の特別区についても、特別規定のない事項について、普通地方公共団体の規定を適用又は準用している。

貸付期間

地方自治法には物品の貸付期間について、特段の規定はおかれていないことから、契約で定めることとなるが、地方公共団体の条例や規則に物品の管理についての規定があれば、それに従うこととなる。

なお、地方公共団体が定めている従来の条例や規則が想定している物品の貸付スキームと IRU スキーム等の間に乖離が生じていることが懸念される。例えば IRU スキームの採用を考えている場合で、従来の条例、規則の規定が物品を長期にわたり特定の他者に使用させることを想定していなかったとき（物品の貸付期間を 1 月と制限する規定がある場合等）などは、関連規定を整備する等の対応が必要となる。

貸付料

貸付料についても契約で定めることとなるが、地方自治法第 237 条第 2 項の規定により、物品は条例又は議会の議決による場合でなければ「適正な対価」なくして貸し付けることはできない。この「適正な対価」については当該財産が有する市場価格（時価）を指すのが通常であるとされている。

3. 開放に適合する財産管理区分

地方公共団体が所有する未利用の光ファイバ芯線を電気通信事業者に開放することは、まさに光ファイバ等に独自の財産的価値を認めるものであり、またこういった未利用の光ファイバ芯線の取引等は民間ではビジネスとして広く存在している。1.(1)で述べたように、光ファイバ等を公有財産と分類するのは、センタ施設等を含む光ファイバ網全体を一体的に捉える場合のみである。このような捉え方は、構築した光ファイバ網のうち、未利用の光ファイバ芯線のみを貸し付けるという実態に馴染まず、不相当と考えられる。

さらに 1.(2) で述べたように、行政財産の目的外使用許可については、期間が原則 1 年とされている上に、公用若しくは公共用に供するため必要が生じたときは、その許可を取り消すことができるとされていることから、その利用関係が不安定であり、電気通信事業者の長期安定的な情報通信ネットワーク構築に難があるといわざるを得ない。

以上のことから、地方公共団体が所有する未利用の光ファイバ芯線を電気通信事業者へ開放する場合は、物品と整理されている光ファイバ等を貸し付けるスキームとすることが適当である。

なお、現在光ファイバ網を公有財産（行政財産）として分類し、公有財産台帳に記載されている場合であっても、一旦行政財産としては公用廃止し、物品として整理し直すことは可能である。行政財産から物品に整理し直した場合、財産管理台帳の記載を変更するとともに、地方自治法第 233 条第 1 項、第 233 条第 5 項及び地方自治法施行令（昭和 22 年政令第 16 号）第 166 条第 2 項の規定により決算と同時に議会に提出する財産に関する書類の数値についても、変更することが必要である。

第5章 開放に係る標準手続

1. 標準手続の対象とするスキーム

「2005年度までに我が国が世界最先端のIT国家になる」との国家目標を実現する上で、「世界最高水準の高度情報通信ネットワークの形成」を促進することが喫緊の課題である。

とりわけ、光ファイバ網については、電気通信事業者のより柔軟なネットワーク構築を可能とし、地域の高速・超高速インターネットアクセス環境の整備を推進する観点から、地方公共団体等、電気通信事業者以外の者が整備・保有している既存の光ファイバ網をいかに効率的に活用するかが重要である。

電気通信事業者ではない地方公共団体の未利用の光ファイバ芯線を、電気通信事業者へ開放するに当たっては、IRUスキームが、地方公共団体のニーズが最も高く、一般的であり、また電気通信事業者側から見ても、長期・安定的なネットワーク構築に最も活用しやすいものであることから、本標準手続においては、IRUスキームに関するものを取りまとめたものである（IRUスキームの概要については、第3章1.(1)参照）。

2. 民間主導原則との関係

光ファイバ網を電気通信事業者へ提供するサービスについては、民間事業者においても行っているところである。

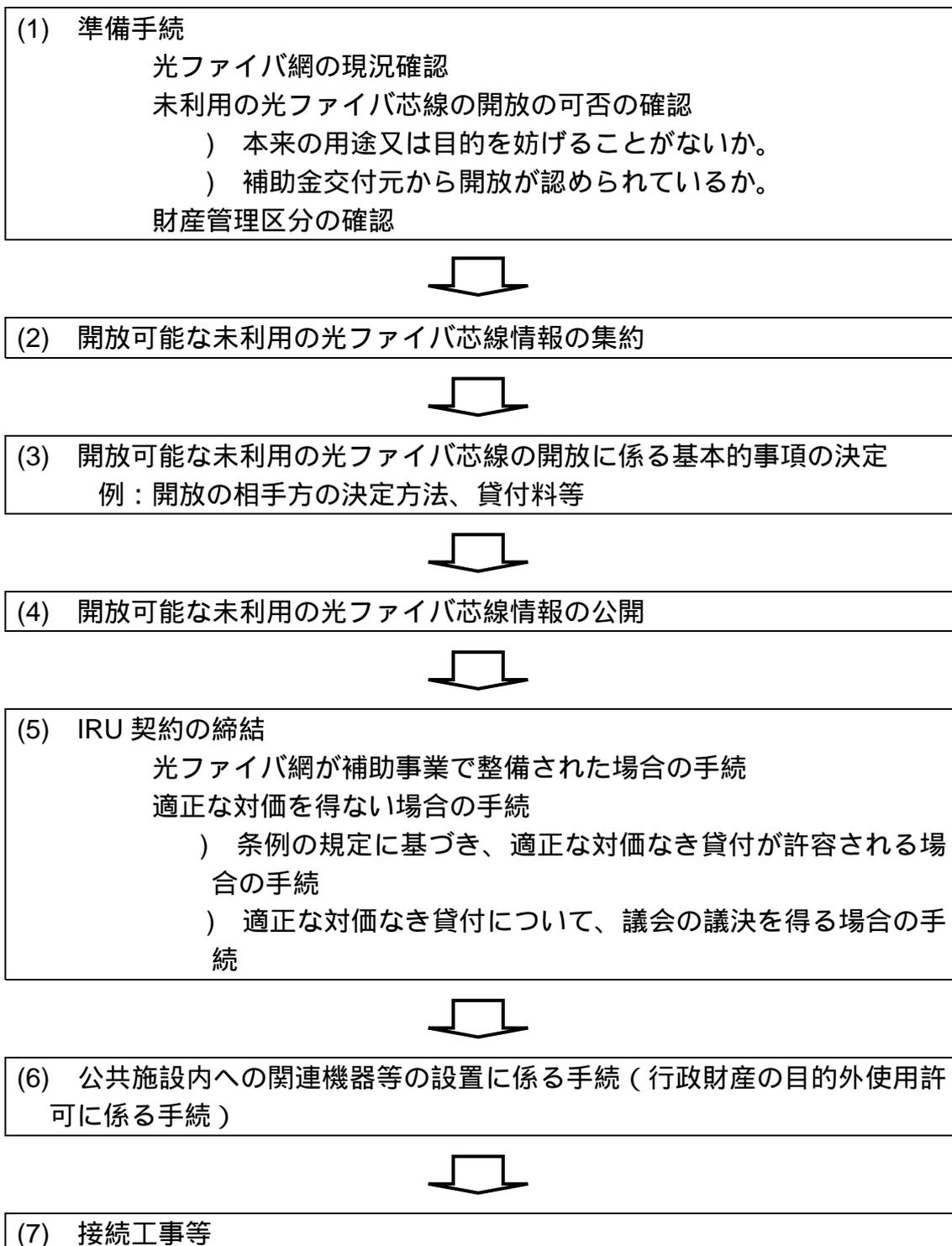
このため、多数の電気通信事業者が競争的にサービス提供を行っている都市部等において、地方公共団体が自ら整備・保有する光ファイバ網を開放することは、これらの民間事業者のサービスと競合するばかりでなく、仮に、利益を追求しない地方公共団体が料金を低く設定した場合には、電気通信事業者の事業を阻害することになるのではないかと懸念がある。

他方で、採算性等の問題から民間事業者による光ファイバ網の整備が進まない条件不利地域においては、地方公共団体が整備・保有する光ファイバ網を活用することで、一般利用者に対するサービスを提供する新規事業者が安価にネットワーク構築を行えるようになり、超高速インターネットアクセス環境の整備が促進されるなど、住民に大きな利益をもたらすものである。

以上を踏まえ、地方公共団体において光ファイバ網を電気通信事業者に開放するに当たっては、当該地域における民間事業者による同種のサービス提供状況を十分に検討し、料金等の決定に際して、民間主導原則に反しないよう配慮することが求められる。

3. 標準手続

開放に係る標準手続 フローチャート



(1) 準備手続

地方公共団体が所有する光ファイバ網は、地域の教育、行政、福祉、防災等の高度化を図ることや下水道等の公共施設の管理することなど様々な目的を有しており、地方公共団体の内部で、実際に構築されている光ファイバ網を運用・管理している部署も多岐にわたることが想定される。また、そもそも財産の管理権限は、基本的には普通地方公共団体の長に属するが、学校その他の教育機関の用に供する財産については教育委員会に、地方公営企業の用に供する財産については公営企業管理者に属する（地方教育行政の組織及び運営に関する法律（昭和31年法律第162号）第23条、地方公営企業法第9条及び第33条第1項並びに地方自治法第149条）こととされている。

未利用の光ファイバ芯線の開放に先立って、光ファイバ網の運用・管理の担当部署において、それぞれの部署が所管する光ファイバ網について、次の作業が必要となる。

光ファイバ網の現況確認

運用・管理する光ファイバ網について、どの区間に光ファイバケーブルが存在しており、その芯線のうち何芯が未利用となっているのか、光ファイバケーブルと機器との接続はどうなっているのか、機器の能力に余裕があるのか等、光ファイバ網の現況を確認することがまず必要となる。

未利用の光ファイバ芯線の開放の可否の確認

未利用の光ファイバ芯線が存在している場合、それを電気通信事業者に開放することが可能かどうかについて検討することとなる。主に次のような点を検討することになる。

） 本来の用途又は目的を妨げることがないか。

電気通信事業者に光ファイバ網を開放することによって、光ファイバ網の本来の用途又は目的を妨げることがあっては本末転倒である。まず光ファイバ網を開放することによって、光ファイバ網の本来の用途又は目的を妨げることがないかの判断を行うこととなる。

） 補助金交付元から開放が認められているか。

電気通信事業者への開放を目的とせずに、国庫補助金を受けて構築されたこれらの光ファイバ網に、未利用の光ファイバ芯線が存在している

場合において、これを電気通信事業者へ開放するためには、原則として¹⁴ 各省各庁の長の承認を受ける必要がある(補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律(昭和30年法律第179号。以下「補助金適正化法」という。)第22条)。都道府県からの補助金等を受けて構築されている場合についても都道府県の条例等で同様に財産処分の制限を設けている例が多いと考えられる。

このため、未利用の光ファイバ芯線が存在していても、それを開放することが可能かどうか、また開放することが可能である場合、どのような者を開放の相手方として認めるか、開放に際してどのような手続が必要か等について、補助金交付元に確認することが必要となる。

例えば、総務省が所管する情報通信格差是正事業中の地域イントラネット基盤施設整備事業については、次の通り取り扱うこととしている。

ア) 未利用の光ファイバ芯線が生じた場合、これを電気通信事業者等に開放することは、情報通信の格差を是正するとともに、高度情報通信ネットワークの基盤整備を図るという情報通信格差是正事業の目的達成に資することから、これを認めることとする。

イ) 開放の相手方は制限しないこととする。

ウ) 財産処分に必要な補助金適正化法に定める各省各庁の長の承認について、次のような特例措置を講じる。

A 補助金交付申請時に未利用の光ファイバ芯線が生じた場合には民間等に開放することもあり得る旨を申し出ていない場合については、情報通信格差是正事業費補助金交付要綱第20条の規定を適用し、届出書の提出をもって補助金適正化法に定める総務大臣の承認があったものとみなすこととする。

B 補助金交付申請時に未利用の光ファイバ芯線が生じた場合には民間等に開放することもあり得る旨を申し出ている場合については、開放後の報告で足りることとする。

財産管理区分の確認

光ファイバ網を行政財産と分類して管理しているか、物品と分類して管理しているか確認することが必要となる。前述の通り、行政財産と分類して管理している場合は、これをIRUスキームにより電気通信事業者へ貸し付けることはできない。未利用の光ファイバ芯線の電気通信事業者への開

¹⁴ 例えば補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令(昭和30年政令第255号)第14条では処分制限を解除しうる場合として次の場合を定めている。

補助事業者が補助金等の全部に相当する金額を国に納付した場合

補助金等の交付の目的及び当該財産の耐用年数を勘案して各省各庁の長が定める期間(処分制限期間)を経過した場合

放を考えるのであれば、光ファイバ網を物品と分類することが適当であり、行政財産と分類しているのであれば、これを物品と分類し直すことが必要である（第4章3．参照）。

(2) 未利用の光ファイバ芯線情報の集約

未利用の光ファイバ芯線の現況やその開放の可否についての情報は、当該光ファイバ網の運用・管理を担当する部署で把握・判断することとなるが、電気通信事業者が、地方公共団体が所有する光ファイバ等の貸与を受けるに当たって、担当部署ごとに個別に照会、申し込み等を行うことを求めると、その作業量が煩雑となり、電気通信事業者の情報通信ネットワークの円滑・機動的な構築を促進するという観点からは望ましくない。上記の準備手続や、その後の地方公共団体内部の事務手続はそれぞれの担当部署で行うにしても、当該地方公共団体が保有する開放可能な未利用の光ファイバ芯線の開放に関する基本的事項の決定、開放可能な未利用の光ファイバ芯線情報の公開や電気通信事業者との交渉等については担当窓口を設定し、一元的に行うことが望ましい。

例えば地域情報化施策担当課や管財担当課に開放可能な未利用の光ファイバ芯線等についての情報を集約し、一元的に対応することなどが考えられる。

(3) 開放可能な未利用の光ファイバ芯線の開放に係る基本的事項の決定

未利用の光ファイバ芯線の開放に当たっての基本的事項について、あらかじめ各地方公共団体において、例えば貸付要綱のような形で定めておく必要がある。この基本的事項については、例えば次のような事項が考えられる。

開放の相手方

未利用の光ファイバ芯線の開放の相手方をどうするかについて定めておくことが必要である。各地方公共団体の開放目的や補助金交付元の定めるところなどに応じて、例えば、（ ）高速・超高速インターネットアクセスサービスの提供についての地域間格差を是正することを目的として、当該地域でこれらのサービスを提供することを予定している電気通信事業者に開放する、（ ）地域の情報化の進展に資することを目的として電気通信事業者又は有線テレビジョン放送事業者に開放する、（ ）開放の相手方について特に限定しない等とすることが考えられる。

なお、本標準は未利用の光ファイバ芯線を電気通信事業者に開放する際の標準手続を定めるものである。

開放の相手方の決定方法

未利用の光ファイバ芯線を電気通信事業者に IRU スキームにより貸し付け、当該電気通信事業者が当該光ファイバ芯線を活用して高速・超高速インターネットアクセスサービスを提供する場合には、これが地方公共団体所有の財産を長期間にわたり特定の他者へ使用させるというスキームとなることから、契約の相手方である電気通信事業者の選定を、公正に行うことが求められる。開放の申し込み受付を公募により行うのかどうか、複数の電気通信事業者から開放の申し込みがあった場合で、開放可能な芯線数の関係上、貸付相手方を限定しなければならないときの貸付相手方の決定方法をどうするか（申し込みの早い者を優先する、抽選を行う等）等、あらかじめ公正な選定手続を定めておく必要がある。

開放の条件

地方公共団体が所有する光ファイバ網を電気通信事業者に開放するのは、未利用の光ファイバ芯線を活用して電気通信事業者が住民向けに高速・超高速インターネットアクセスサービスを提供すること等によって、情報化の進展に対応した住民サービスの向上という公益の達成が期待されるためにほかならない。よって光ファイバ等の貸付を受けた電気通信事業者が、実際に住民向けの高速・超高速インターネットアクセスサービス等の電気通信サービスを提供しない場合には、当該貸付に公益性を認めることはできない。電気通信事業者への貸付に当たり、当該未利用の光ファイバ芯線を活用した、住民向け高速・超高速インターネットアクセスサービスを、当該電気通信事業者が当該芯線の使用が可能となった日から、一定期間内に提供することを条件とし、正当な事由なくしてそれが達成できない場合には貸付を取り消すことなどは、貸付の公益性の担保手段として有効であり、こういった条件を別途取り決めておくことが考えられる。

貸付料

光ファイバ等の貸付料について定める必要がある。一般的に電気通信事業者の光ファイバ網構築・運営に係る支出項目としては、

-) 営業費
-) 運用費
-) 施設保全費（保守費）
-) 共通費・管理費
-) 試験研究費
-) 租税公課
-) 減価償却費
-) その他投資等償却費
-) 固定資産除去費

) 貸倒損失
x i) 報酬(自己資本費用+他人資本費用)
等が挙げられる。

地方公共団体が整備・保有する光ファイバ網を IRU スキームで電気通信事業者に貸与する際の貸付料については、契約で定めるべきものであるが、地方公共団体においては、上記項目のうち費用が発生しないものがあることに留意すべきである。

また、貸付料の決定に際しては、電気通信事業法、地方自治法、補助金適正化法の観点から以下のような点に配慮する必要がある。

まず、電気通信事業法の観点からは、IRU の対価について「使用期間全体にわたる合理的な使用料金の設定がされていること」が必要である。

また、地方自治法の観点からは、地方公共団体が所有する財産は住民の貴重な財産であることから、これを有効活用すべく、原則として「適正な対価なくして貸し付けることはできない」とされている。

さらに、当該光ファイバ網が、国庫補助金で整備されたものである場合には、補助金適正化法の観点から、相当の収益が生ずると認められる場合には、補助金の全部又は一部を国に返還することとなるケースがある。

(4) 開放可能な未利用の光ファイバ芯線情報の公開

電気通信事業者から地方公共団体に対して、光ファイバ網の開放を申し込むに先立ち、地方公共団体がどういった区間にどれだけの開放可能な未利用の光ファイバ芯線を所有しているか、貸付料はいくらか等の情報を、電気通信事業者に公開するための手続が必要となる。

そもそも電気通信事業者は、どの地方公共団体が光ファイバ網を構築しているか等の情報を把握することが困難と考えられることから、開放可能な未利用の光ファイバ芯線を所有する地方公共団体が、開放可能な区間、開放可能な芯線数、貸付料等の情報を公開することが必要となる。その手段としては、広報誌やホームページの活用等が考えられる。

開放可能な未利用の光ファイバ芯線情報の公開は、例えば次のような様式により行うことが考えられる。

町における光ファイバ芯線貸しのご案内

1. 光ファイバケーブルの敷設区間及びアクセスポイント

【光ファイバケーブル敷設区間】

町役場 - 公民館 - 小学校 - 小学校 - 中学校
(ネットワーク構成は別添のとおり)
町役場において、 県の ネットワークと接続しています。

【アクセスポイント】

町役場	町	× × 1 - 2 - 3
公民館	町	4 - 5 - 6
小学校	町	7 - 8 - 9
小学校	町	1 - 4 - 7
中学校	町	2 - 5 - 8

2. 貸付対象者

電気通信事業者

3. 貸付単位

アクセスポイント間で 芯単位で貸付します。

4. 外部との接続工事について

接続工事は 町職員立ち会いの下、電気通信事業者にて行っていただきます。

アクセスポイントまでの伝送路は、電気通信事業者にてご用意いたします。

5. 貸付期間

原則として10年。(IRU契約を締結いたします。)

6. 貸付料

円 / 1芯 / 1m / 1年

1年分を前払いしていただきます。

利用の申し込みやお問い合わせ等は、下記までお願いします。

お問い合わせ先

町 課

〒 xxx-xxxx

県 町 × × 1 - 2 - 3

TEL xxx-xxx-xxxx

FAX xxx-xxx-xxxx

E-MAIL xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

(5) IRU 契約の締結

(4)により公開された情報に基づき、電気通信事業者が地方公共団体に対して開放を希望する光ファイバ等の貸与の申し込みを行い、地方公共団体と電気通信事業者との間で貸付条件を協議し、合意すれば契約を締結するという手続となる。IRU 契約の要件については第 3 章を参考とされたい。

なお、IRU 契約の締結に当たり、次のような手続をとる必要がある場合がある。

光ファイバ網が補助事業で整備された場合の手続

補助事業で光ファイバ網を構築した場合、未利用の光ファイバ芯線が存在している場合であっても、これを電気通信事業者に貸し付けることが可能かどうか、また可能である場合、どのような手続が必要か等については補助金交付元の定めるところによる。電気通信事業者と IRU 契約を締結するに先立って、それぞれの補助事業ごとに定められた所要の手続、例えば目的外使用の承認を受ける、目的外使用の届出を行う等が必要となる場合があるが、その場合は、地方公共団体は所要の手続をとる必要がある。

適正な対価を得ない場合の手続

地方自治法第 237 条第 2 項の規定により、条例又は議会の議決による場合でなければ適正な対価なくして貸し付けることはできないとされているので、適正な対価を下回る対価しか取らず、あるいは対価を取らずに貸し付ける場合には、次のような手続が必要となる。

) 条例の規定に基づき、適正な対価なき貸付が許容される場合の手續

地方公共団体が適正な対価なくして財産を貸し付ける場合には、条例で定める場合を除くほか、議会の議決を要することとされている（地方自治法第96条第1項第6号）。その条例を旧自治省が示した条例準則（昭和38年10月30日付け、自治丁行発第68号。各都道府県総務部長宛自治省行政局行政課長通知）¹⁵ に準じて制定している場合には、「公益上の必要に基づく」場合に適正な対価なくして貸し付けることが可能とされているので、「公益上の必要に基づく」かどうかを検討することとなる。

採算性等の観点から、民間事業者により高速・超高速インターネット

¹⁵ 自治省行政局行政課長通知（抄）

自治丁行発第68号 昭和38年10月30日
各都道府県総務部長 宛
自治省行政局行政課長
条例準則等の送付について
地方自治法の一部改正（財務関係）に伴う条例準則等を別添のとおり送付しますから ご参考に資せられたい。
なお、貴管下市町村にも、この旨ご示達のうえよろしくご指導をお願いいたします。
記
1～5 （略）
6 財産の交換、譲与、無償貸付等に関する条例準則
7 （略）
（略）
財産の交換、譲与、無償貸付等に関する条例準則について
1 本条例案は、地方自治法第237条第2項の規定に基づく財産の交換並びに適正な対価 によらない財産の譲与及び貸付けの範囲等に関し、一般的な事項を示したものである こと。したがって、各地方公共団体において条例を制定する場合には、本条例案の規 定事項を適宜取捨選択する必要があること。
2 （略）
3 普通財産及び物品の譲与、減額譲渡、無償貸付、減額貸付は、公用、公共用その他の 公益上の必要に基づく場合又は当該普通財産又は物品を寄附者等特別の縁故関係のあ る者にこれを行なう場合等特別の必要がある場合に限られるべきものであること。
附属の各条例準則（抄）
財産の交換、譲与、無償貸付等に関する条例準則
第1条～第6条 （略）
（物品の無償貸付又は減額貸付）
第7条 物品は、公益上必要があるときは、他の地方公共団体その他公共団体又は私人 に無償又は時価よりも低い価額で貸し付けることができる。
附 則 （略）

アクセスサービスの提供がされていない過疎地域等の条件不利地域において、地域の情報化を推進し、もって住民福祉の向上を図るために、地方公共団体が所有する未利用の光ファイバ芯線を、当該光ファイバ芯線を活用して高速・超高速インターネットアクセスサービスの提供を予定している電気通信事業者に貸し付ける場合等は、通常は「公益上の必要に基づくとき」という基準に適合すると考えられる。

当該地方公共団体が定めている条例では、電気通信事業者に対する適正な対価を得ない貸付が許容されていない場合は、)により個別に議会の議決を得て貸し付けることとなる。

) 適正な対価なき貸付について、議会の議決を得る場合の手続

物品等の財産を適正な対価なくして貸し付けることができる一般的基準を条例として定めていない場合、又は条例を定めていても電気通信事業者への貸付が当該条例に定められた要件に適合しない場合は、契約の締結に当たって議会の議決を得る必要がある。

この場合は、地方公共団体と電気通信事業者との間で貸付条件を協議して合意すれば仮契約を締結し、その後、当該貸付条件により、当該電気通信事業者と契約を締結することについて、議会に諮り、議会の議決を得られた場合に、本契約を締結するという手続となる。

(6) 公共施設内への関連機器等の設置に係る手続（行政財産の目的外使用許可に係る手続）

未利用の光ファイバ芯線の開放を受けて、高速・超高速インターネットアクセスサービスを提供するために、センタ施設等の地方公共団体の公共施設内に、電気通信事業者が機器等を設置する必要がある場合がある。こうした場合には、IRU 契約の締結に係る手続の他に、行政財産の目的外使用に係る手続を経る必要がある。

電気通信事業者から地方公共団体に対して、設置を希望する機器等を明示した上で、設置する公共施設等の使用の許可申請を行い、地方公共団体は当該機器等の設置によって当該公共施設等の本来の用途又は目的を妨げることがないかどうかを検討し、問題ないと判断した場合にはこれを許可するという手続となる。

なお、この目的外使用にかかる使用料については原則として当該地方公共団体の条例の定めるところによるが、地方公営企業の用に供する行政財産の使用料については、公営企業管理者が定めるところによる（第4章1.(2)参照）。

(7) 接続工事等

地方公共団体が所有する未利用の光ファイバ芯線と、電気通信事業者の伝送路とを接続する工事や、センタ施設等の地方公共団体の公共施設内等に電気通信事業者の伝送路や機器等を設置する工事については、地方公共団体の職員の立ち会いの下で施工されることが望ましい。

なお、以上を踏まえ IRU 契約書の一例を別添に示すので参照されたい。

(別添)

一例

光ファイバ芯線の賃貸借に関する契約書

町(以下「甲」という。)と株式会社#####(以下「乙」という。)とは、甲が所有する光ファイバ芯線の賃貸借に関して、次のとおり契約(以下「本契約」という。)を締結する。

(本契約の対象)

第1条 本契約は、甲が所有する下記の光ファイバ芯線(以下「本物件」という。)を対象とする。

使用区間	光ファイバケーブル芯線	
	芯線数	使用距離
始点 町役場(町 × × 1-2-3)	芯	m
終点 小学校(町 1-4-7)		

2 本物件の位置および概要は別添図面のとおりとする。

(技術仕様)

第2条 本物件の技術仕様は別紙のとおりとする。

(使用の原則)

第3条 乙による本物件の使用は、本契約に別段の定めがない限り、乙の書面による同意なしに甲から一方的に中断又は終了し得ないものとし、甲は、第5条に定める期間中、乙の電気通信事業用として長期安定的に使用させるものとする。

2 甲は、第1条に定める使用区間において乙が使用していない光ファイバ芯線を乙以外の者に使用させる場合、本契約に比し不当な差別的条件で提供しないものとする。

(乙の設備との接続等)

第4条 乙は、本物件を使用するに当たり、必要な伝送・中継設備その他の付属物を自らの費用により設置し、維持管理を行う。

2 乙は、本物件と乙が所有する光ファイバ芯線を、甲が所有するクロージャール等接続盤内において接続するものとする。

3 前項の接続については、甲の立会いの下、乙の責任において施工するものとする。

- 4 本物件に接続するために設置する甲が所有するクロージャーより本物件側は甲が、乙が所有する光ファイバ芯線側は乙が、それぞれの責任において適切な品質に維持管理する。

第4条に関しては以下のような書きぶりもあり得る。

(乙の設備との接続等)

- 第4条 乙は、本物件を使用するに当たり、必要な伝送・中継設備その他の付属物を自らの費用により設置し、維持管理を行う。
- 2 乙は、本物件と乙が所有する光ファイバ芯線を、乙が所有するクロージャー等接続盤内において接続するものとする。
- 3 前項の接続については、甲の立会いの下、乙の責任において施工するものとする。
- 4 本物件に接続するために設置する甲が所有する光ファイバ芯線等の接続端子等より本物件側は甲が、乙が所有するクロージャー及び光ファイバ芯線側は乙が、それぞれの責任において適切な品質に維持管理する。

(使用期間)

- 第5条 乙による本物件の使用期間は使用開始日より10年間とする。
- 2 乙は本物件の使用期間の延長を希望する場合、使用期間の満了する日の6ヶ月前までに延長を希望する期間を明示し、書面により甲に申し入れを行うものとする。この場合は、甲乙双方誠意をもって協議し、合意の上は期間を延長できるものとする。この場合における当該延長期間については、第1項の規定は適用しない。

第5条に関しては以下のような書きぶりもあり得る。

- 第5条 乙による本物件の使用期間は平成 年3月31日までとする。
- 2 甲及び乙が期間満了の6ヶ月前までに、更新をしない旨を書面により合意した場合を除き、本契約は同一条件で1年間更新されるものとする。ただし使用開始日から10年を経過した後は、甲が6ヶ月前までに乙に通告すれば、乙の同意なく更新を拒否することができる。

(貸付料)

- 第6条 本物件の貸付料は、営業費、運用費、施設保全費、共通費・管理費、試験研究費、租税公課、減価償却費、その他投資等償却費、固定資産除去費、貸倒損失等を基礎に算定し、年額 円(内訳: 円/1芯/m/年 × m × 芯)とする。
- 2 使用期間の初日が属する年度及び使用期間の満了する日が属する年度の貸付料は、当該初日が4月1日である場合又は当該満了する日が3月31日である場合を除き、前項の貸付料を365で除して得た値(第5項及び第15条第3項において「日割額」という。)に当該年度の使用日数を乗じた額とする。

- 3 貸付料の支払いについては、甲の請求に基づき 1 年分を前払いするものとする。
- 4 前項に定めるほか、貸付料の支払方法については甲乙協議の上、別途定めるものとする。
- 5 甲は、本物件が甲の故意又は過失で使用不能となった場合は、日割額に使用不能日数(甲が第 12 条第 1 項又は第 2 項による連絡を受けた時刻から使用できない状態が解消された時刻までの時間(60 分未満を切り捨てた 1 時間単位の時間)を 24 で除して得た商の整数部分)を乗じて得た額を、乙に返還するものとする。
- 6 前条第 2 項の規定により使用期間を延長した場合において、経済変動等に伴い、金利、物価、労働賃金等に大幅な増減が生じたときは、貸付料について甲乙双方誠意をもって協議し、決定する。

(遅延損害金)

- 第 7 条 乙は、乙の責により甲が定める支払期日までに貸付料を支払わない場合、支払期日の翌日から起算して支払日までの期間につき年率 %の割合で計算して得た遅延損害金を甲に支払うものとする。

(関係行政官庁への手続)

- 第 8 条 乙は、本物件の使用につき、関係法規等を遵守するとともに、関係行政官庁に対する必要な手続を乙の責任において行うものとする。
- 2 甲は、本物件の設置及び維持管理にあたり、関係法規等を遵守するとともに、関係行政官庁に対する必要な手続を甲の責任において行うものとする。

(施設の移設等)

- 第 9 条 甲は、本物件について移設工事を施工する必要がある場合、速やかに書面により乙に通知を行い、移設工事の期間、内容等について協議を行うものとする。ただし、緊急その他やむを得ない場合はこの限りでない。
- 2 移設工事により本物件の敷設ルートを変更する場合、甲は乙の電気通信事業が円滑に行われるよう配慮し、変更後の敷設ルートが最適となるよう努めるものとする。なお、敷設ルートの変更により対象ケーブル長に変更が生じても貸付料の変更は行わない。

(保守管理等)

- 第 10 条 甲は、本物件が第 2 条の技術仕様を満たすように保守管理に努めるものとする。
- 2 甲は、送受信装置、双方向画像電送装置、光ファイバケーブル芯線等の保守又は工事上やむを得ない場合、本物件の使用を一時的に中断させることができる。
 - 3 甲は、前項の規定に基づき本物件の使用を中断させる場合、その理由、中断日及び中断期間を予め書面により乙に通知し、協議を行うものとする。ただし、緊急その他やむを得ない場合はこの限りでない。

- 4 前3項に定める他、保守管理に係る事項については、甲乙別途協議の上、定めるものとする。

(損害賠償)

第11条 乙の故意又は過失によって、甲又は第三者に損害を与えた場合、乙はその責めを負う。

2 甲の故意又は過失によって、乙又は第三者に損害を与えた場合、甲はその責めを負う。

3 本物件が第三者に損害を及ぼしたときは、甲乙協力して処理を行うものとする。

(事故発生時の処理)

第12条 乙は、本物件に起因すると思われる通信障害等の事故を検知した場合、甲に事故の発生日時、場所、内容等を速やかに連絡しなければならない。甲は連絡後直ちに現場調査等を実施し、その結果を乙に連絡するものとする。

2 甲は、本物件に異常を発見した場合は、直ちに乙に連絡するものとし、乙は通信障害の有無を確認して甲に連絡するものとする。

3 前2項の場合において、本物件の復旧、補修措置を必要とする場合は、甲は速やかにこれを実施するものとし、乙はこれに協力するものとする。

4 前項による措置を行う場合は、復旧方法及び費用負担等についてあらかじめ甲乙協議するものとする。

(権利義務の承継)

第13条 甲及び乙は、本契約に定める権利義務を第三者に譲渡し、又は第三者のために権利を設定してはならない。

(秘密の保持)

第14条 甲及び乙は、本契約に基づき知り得た相手方の営業上及び技術上の秘密を第三者へ開示又は漏洩してはならない。本契約の解除又は本物件の賃貸借期間満了後も同様とする。ただし、法令上必要とされているとき又は相手方の書面による承諾を得たときは、この限りでない。

(契約の解除)

第15条 甲は、乙が次の各号のいずれかに該当する場合、催告をなせずに本契約を解除することができる。

(1) 破産手続の開始、会社整理の申立てを受け、又はこれらの申立てを自ら行ったとき。

(2) 電気通信事業法第18条の規定に基づき、乙が本契約に係る電気通信事業の休止若しくは廃止又は法人を解散したとき。

(3) 電気通信事業法第14条の規定に基づき、乙の事業の登録が取り消されたとき。

2 甲及び乙は、相手方が次の各号のいずれかに該当する場合、書面による催告

の上、相当な期間において本契約を解除することができる。

- (1) 甲又は乙が、その責めによる事由により本契約に定める重要な事項に違反したとき、重大な信義則違反があったとき又は正当な事由なく本契約に基づく業務を遂行しないとき。
 - (2) その他本契約の円滑な履行が困難になったとき。
- 3 本契約が解除された場合、当該年度の貸付料は日割額に当該年度の初日から解除の日までの日数を乗じて得た額とする。

(契約の変更)

第 16 条 本契約の各条項の内容は、甲乙双方の書面による合意によってのみ変更することができる。

(契約の有効期間)

第 17 条 本契約の有効期間は、本契約に別段の定めがない限り、本契約締結の日から本物件の使用期間の満了する日までの期間とする。

(端数処理)

第 18 条 日割額その他の計算において、その計算結果に 1 円未満の端数が生じた場合はその端数を切り捨てる。

(協議事項)

- 第 19 条 本契約に定めない事項又は本契約の解釈に疑義が生じたときは、甲乙協議の上、誠意をもって解決するものとする。
- 2 自然災害、関係行政庁の指導又は第三者に起因する事情等により、本契約に定める事項を履行できなくなった場合は、甲乙別途協議の上、誠意をもって解決を図るものとする。

以上、本契約締結の証として本書 2 通を作成し、甲及び乙が、それぞれ記名捺印の上、各々1通を保有するものとする。

平成 年 月 日

(甲) 県 町 × × 1 - 2 - 3
町
町長

(乙) 県 市 1 - 1 - 1
株式会社 # # # # #
代表取締役社長

アンダーラインは IRU の要件として契約に盛り込むべき事項である（詳細については第 3 章 1 . (1)、「電気通信事業者のネットワーク構築マニュアル」参照。http://www.soumu.go.jp/joho_tsusin/policyreports/japanese/misc/NetWork-Manual/index.html）

別紙

光ファイバ芯線の仕様

項 目	仕 様
ファイバ種別	
モードフィールド径	
クラッド径	
クラッド非円率	
偏心率(率)	
カットオフ波長	
全分散係数	
伝送損失	
損失温度変動	

【別紙の記載の一例】

光ファイバ芯線の仕様

項 目	仕 様
ファイバ種別	1.3 μm シングルモード型石英ファイバ
モードフィールド径	9.5 $\mu\text{m} \pm 1 \mu\text{m}$ (= 1.3 μm)
クラッド径	125 $\mu\text{m} \pm 2 \mu\text{m}$
クラッド非円率	2 % 以下
偏心率(率)	1 μm 以下
カットオフ波長	1.10 ~ 1.35 μm
全分散係数	3.5ps / nm \cdot km 以下 (1,285 ~ 1,330nm)
伝送損失	0.5dB / km 以下 (= 1.3 μm)(常温において)
損失温度変動	0.1dB / km 以下 (= 1.3 μm)(- 30 ~ 60 において)